

## 717 会陰部皮下腫瘍の1例

芝俊成<sup>1)2)</sup>、覚野綾子<sup>2)</sup>、片岡保朗<sup>1)</sup>、橋本貴彦<sup>3)</sup>  
土井裕<sup>3)</sup>、藪元秀典<sup>3)</sup>、加古泰一<sup>4)</sup>

1) 明和病院内科、2)同臨床検査部、3)同泌尿器科、4)同放射線科

【症例】40歳代、男性。

【家族歴】母親が肝細胞癌(HCV陽性)。

【現病歴】約1年前より下腹部違和感に気付いていた。次第に増大してきたこと、歩行障害が出現したことより当院内科を受診した。MRI上、脊椎への多発転移を指摘された。画像上原発巣は不明であるため、泌尿器科にて会陰部腫瘍の摘出生検が施行された。術中、陰茎との連続性はなし。両側精巣の腫大はなし。腫瘍は、皮膚との連続性はなく、皮下に存在していた。腫瘍マーカー(CEA、CA19-9、AFP)は正常範囲内である。

【組織所見】周囲に膠原線維を伴いながら、大型の類円形、多角形の腫瘍細胞がびまん性あるいは胞巣状に増生する像を認める。胞体は豊富で好酸性を呈しており、核小体は明瞭で多核細胞、巨細胞も散見される。

【問題点】病理組織学的診断